The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ほめ」及び「ほめに対する返答」の日タイ対照研究
Author(s)	Korsatianwong, Sayan
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58301
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【10】

氏　　名	SAYAN KORSATIANWONG（サーヤン コーサティアンウォン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４７８８　号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**「ほめ」及び「ほめに対する返答」の日タイ対照研究**
論文審査委員	（主査） 准教授　筒井　佐代 （副査） 教　授　鈴木　　睦　　教　授　宮本マラシー　　教　授　真嶋　潤子 准教授　堀川　智也

論　文　内　容　の　要　旨

先行研究

近年、日本語の依頼、断り、謝罪などといった言語行動に関する研究は、数多く発表されてきており（金田一 (1987)、熊取谷 (1994)など）、「ほめ」と「ほめに対する返答」に関する研究も様々な観点から行われている（小玉(1996)、寺尾 (1996)など）。「ほめ」とそれに対する返答は、基本的にポジティブ・ポライトネス（Brown and Levinson 1987）を表す言語行動であり、社会的な潤滑油の役割を果たすものとみなされている。しかし、一方で、「ほめ」は対人関係に基づいて行われるため、不適切なほめは相手の面子を脅かす行為（Face Threatening Act）になる恐れがあり、対話者の間に摩擦が生じるという危険性も指摘されている。したがって、ほめを適切に行うには、どのような相手に対して、どのようなことを、どのような表現でほめればよいのかということを、明らかにすることが必要である。

さらに、この「ほめ」と「ほめに対する返答」は、異なる文化背景の下では異なった言語形式や状況において行われていると考えられる。本研究で扱うタイ語については、ほめの研究は未だ少なく（Gajaseni(1994)、Songthama(2001)など）、明らかになっていない部分が多い。

そこで本研究では、コミュニケーションにおいて重要な役割を果たす「ほめ」と「ほめに対する返答」について、日本語とタイ語の対照研究を行い、日本語とタイ語の「ほめ」および「ほめに対する返答」に、どのような類似点及び相違点があるかを明らかにすることを試みた。特に、親疎関係、上下関係、性別、ほめの対象物という、４つの社会的な要因に注目し、日本語とタイ語の「ほめ」および「ほめに対する返答」と、それらの要因との関連性や、日タイの社会文化的規範の影響、両言語で用いられる「ほめ」と「ほめに対する返答」の表現の異同などを考察し、日本語とタイ語の「ほめ」と「ほめに対する返答」の特徴を明らかにした。

ただし、「ほめに対する返答」については、コーサティアンウォン（2004）ですでに研究を行っているため、本稿では、「ほめ」について研究を行い、最後にコーサティアンウォン（2004）の結果と合わせて、「ほめ」と「ほめに対する返答」についての特徴を考察した。

研究方法

本稿での「ほめ」の研究方法としては、「自粛書きこみ式アンケート」とフォローアップ・インタビューの2種類の調査方法を用い、日本語母語話者とタイ語母語話者それぞれについて、高校教師（日本語母語話者：40名／タイ語母語話者：40名）と大学生（日本語母語話者：80名／タイ語母語話者：100名）に対して、調査を行った。このような協力者を設定したのは、「ほめ」を、ほめる相手によって「対等ほめ」、「上下ほめ」、そして「下上ほめ」に分けたためである。アンケート中では、このようなほめの相手との「上下関係」以外に、相手との「親疎関係」「性別」、および「ほめの対象：能力／性格／外見／持物」という4種類の要因によって、状況を設定し、その状況において何か発話するかどうかと、発話する場合の表現について、回答してもらうという方法をとった。調査は、それぞれの対象者の母国において、対象者の母語を用いて行った。タイでの調査は2009年8月から9月にかけて、日本での調査は2009年12月から2010月にかけて実施した。

調査結果の分析については、各言語における「対等ほめ」（親／疎：学生同士）、「上下ほめ」（親のみ：先生から学生／先輩から後輩）、「下上ほめ」（親のみ：学生から先生／後輩から先輩）それぞれについて、アンケートで設定した各状況での何らかの発話の出現率と、そのうちの「ほめ」の発話の割合を見た上で、「ほめ」の発話におけるほめ表現のパターンを、ほめの対象と相手との性別という二つの要因によって分類し、その割合を百分率で集計した結果を基に、考察を行った。また、ほめの具体的な表現について、両言語での特徴的な表現の傾向についても考察した。その後、両言語を対照し、その異同について論じた。

分析結果と考察

本稿で明らかになった、日本語母語話者とタイ語母語話者の類似点および相違点そしてそれぞれの母語話者の特徴について、①対等ほめ、②上下ほめ、そして③下上ほめの順に以下のようにまとめる。

①対等ほめ

対等ほめにおいては、まず、日タイ共に、親の関係でも疎の関係でも同様にほめが行われるのは、対等関係の場合に限られており、さらに、親しい人同士におけるほめの方が、親しくない人同士におけるほめよりも、ほめを言う割合が高いということが分かった。

対等関係における親しい人同士のほめでは、日タイ共に、「能力」、「性格」、「外見」そして「持物」といった4つの対象のすべてをほめる傾向があり、親しくない人同士のほめでは、「外見」と「持物」という対象については、あまりほめないということが分かった。

「対等ほめ」におけるほめの表現パターンについては、日タイの違いが現れた。日本語母語話者の「能力」と「性格」に対するほめでは、親疎共に、「いい、上手い、すごい、偉い」などのような「①明示的ほめ」のパターンが最も多かった。一方、タイ語母語話者のほめでは、親疎ともに、「能力」に対するほめにおいては、「**ร้องเพลงเพราะ**（歌が）うまい」、「**เสียงดี**いい（歌声）」など「①明示的ほめ」パターンが最も多く、「性格」に対するほめでは、「**เป็นคนดีนะแก** <u>**คราวหน้าไปด้วยดิ**</u>（いい人だね。<u>次回私も一緒に行ってもいい</u>？）」のような「①明示的ほめ」と「②暗示的ほめ」を組み合わせたパターンが最も多かった。

また、日本語母語話者のほめには、親疎による表現の違いがあまりなかったが、タイ語母語話者のほめでは、親疎によって表現の違いが現れた。タイ語母語話者の親しい「対等ほめ」において、「②暗示的ほめ」の表現パターンが多く現れていることが目立った。本稿では、この「②暗示的ほめ」について、表現の意味内容により様々な下位分類を行っているが、その中でも、タイ語母語話者が多く用いる最も顕著な表現としては、場を盛り上げるために、「**ไม่น่าเชื่อ เพราะอะไรขนาดนี้**！（信じられない。こんなに素晴らしい声なんて）」のように、相手に対して大げさにほめる表現、また「**มึงเปิดเทปปะเนี่ย**（お前、テープ流してなかった？）」のように、皮肉やけなしを装ったりしたような冗談めかした表現が挙げられる。

このような「②暗示的ほめ」パターンの冗談は、日本語母語話者同士のほめにおいても、タイ語母語話者同士の「疎」の関係におけるほめにも、まったく現れていなかったことが本稿の調査で明らかになった。このような冗談を用いた表現が使用される理由は、お互いによく知っている親しい人同士であることから、直接に相手をほめることは気恥ずかしく、少し表現を捻って冗談で相手をからかうほうが楽しいということであり、本気で皮肉や嫌味を言うわけではないことが、フォローアップ・インタビューで明らかになった。このような「②暗示的ほめ」パターンの冗談は、「親しい対等関係」の親友だけでなく、「親しい先輩」や「親しい後輩」そして場合によって「親しい先生」にも使用されているということが本稿で確認され、特にほめ手が男性である場合（MMほめとMFほめ）は、ほめ手が女性である場合（FMほめとFFほめ）よりも多く用いられる。これは男性のタイ語母語話者（大学生）は、直接ほめるのが気恥ずかしいという気持ちもあり、それでも相手と親しい関係であることを証拠として表に表すために、このような冗談を使用し相手をほめる方法をとっていると解釈できる。

このような冗談は、「ほめに対する返答」にも用いられるものであり、「親」の関係におけるほめに対する「回避型」の返答として、よく使われる。場合によっては、「**พูดจริงหรือประชดเนี่ยะ**（本当にほめているの？皮肉なの？）」、「**โกหกโคตร**（うそつけ！）」などその冗談の度が強すぎて、相手の誠意を疑うような返答にも聞こえてしまう。このような返答は、ほめられるのが恥ずかしいから、ほめられたことに関する話題から逸らしたいということが考えられる。一方、日本語母語話者の「ほめに対する返答」では、「私はこの料理しか作れないの」のような否定的な要素を含んだ理由や情報を提示して、ほめの度合いを軽減し、相手に対して謙遜を示そうとする配慮が見られた。

②上下ほめ

本稿では、上の立場の者から下の立場の者に対してほめる場合を、「上下ほめ」とし、相手によって「学生への上下ほめ」と「後輩への上下ほめ」に分けて考察してきた。「学生への上下ほめ」においては、日本語母語話者とタイ語母語話者共に、同様の傾向が見られ、以下の3点にまとめられる。

1点目は、学生の「持物」をほめない割合が多く、「ふさわしくない話題」や、「プライバジーに関わるもの」などの理由で、先生が学生の持物をあまりほめないことが明らかになった。2点目は、学生の「能力」には、「**ร้องเพลงเพราะ**（歌が）うまい」など、「外見」には、「**หล่อ, เท่ห์, ดูดี**（格好いい）」「**สวย, ดูดี**（きれい）」など「①明示的ほめ」が最も多く、そして、3点目は、「性格」には、「**ดีจัง ทำต่อไปนะจ๊ะ**、いいですね。<u>頑張ってください</u>。」のような「①＋②C:励まし・労い」のパターンが最も多かった。

また、「後輩への上下ほめ」においては、日タイで違いが見られ、日本語母語話者同士では、「能力」と「性格」に対するほめは、「①明示的ほめ」パターンが最も多く、「外見」と「持物」に対するほめでは、対象に対する情報を求める表現を用いた「①＋他」が最も多く用いられた。一方、タイ語母語話者同士では、「能力」「外見」「持物」では「①明示的ほめ」が最も多く、「性格」に対するほめは、「**เอ็งนี่ใจบุญจริงๆ <u>มีเวลาว่างพาพี่ไปหน่อยดิ</u>**（君って優しいね。<u>今度時間あったら、私を連れて行って</u>。）」のような「①＋②A：頼み・要求」が最も多かった。また、「能力」と「性格」に対して、ほめ手（先輩）が男性である場合は、「対等ほめ」と同じように、「②暗示的ほめ」の冗談やけなしを装った表現を利用し、場を盛り上げる方法が見られた。

続いて、「上下ほめ」とほめに対する返答の関係については、コーサティアンウォン（2004）で扱った、先生が学生をほめる場合に限られるが、日タイ同様、受け入れ型の返答スタイル、特に「ありがとうございます」という感謝の表現が非常に多かった。これはおそらくほめ手である先生は上の立場に存在し、更に評価する権限も持っているので、下の立場にいる学生が「ほめ」を否定することはほめ手である先生の面子を侵す行為（FTA）になる恐れがあるためであろうと考えられる。

③下上ほめ

本稿では、下の立場の者から上の立場の者に対してほめる場合を、「下上ほめ」とし、相手によって、「先生への下上ほめ」と「先輩への下上ほめ」に分けて考察してきた。まず、「先生への下上ほめ」において、日タイで見られた違いとして、先生の「外見」について、日本語母語話者の学生、特に男性は先生の外見についてあまりほめないが、タイ語母語話者の学生は、性別を問わず、「**หล่อ, เท่ห์, ดูดี**（格好いい）」「**สวย, ดูดี**（きれい）」など「①明示的ほめ」パターンを用い、先生をほめる割合が高いということである。一方、先生の「能力」についてのほめ表現は、両言語ともにほめる割合が多く、「**ร้องเพลงเพราะ**（歌が）うまい」などの「①明示的ほめ」が使用される。

続いて、「先輩への下上ほめ」においては、日本語とタイ語で、共通する特徴が多く見られた。まず、「能力」と「外見」の二つの対象に対するほめでは、日タイ共に「①明示的ほめ」パターンが最も多く、「能力」には「**ร้องเพลงเพราะ**（歌が）うまい」、「**เสียงดี**いい（歌声）」などを、「外見」には、「**หล่อ, เท่ห์, ดูดี**（格好いい）」「**สวย, ดูดี**（きれい）」「**น่ารัก**（かわいい）」などが用いられた。性別による違いは現れなかった。

「性格」と「持物」に対するほめでは、日タイ共に、男性がほめ手である場合は、「①明示的ほめ」が多く、「性格」には、「**ดี**いい」「**ใจดี**優しい」などを、「持物」には、「**เท่ห์, ดูดี**（格好いい）」「**สวย, ดูดี**（きれい）」などが使用された。反対に、女性がほめ手である場合、「①＋他」が多く、ほめるとともに、対象に関わる情報を追加要求する表現が多く用いられる。

タイ語母語話者だけに見られる特徴としては、「先輩へのほめ」も「先生へのほめ」も、能力に対するほめの表現には、「**อาจารย์ โห นึกว่าดาราที่ไหน**（先生、へえ、俳優かと思いましたよ。）や「**แหม นึกว่านักร้องตัวจริงนะครับพี่**（へえ！（歌手）本人が来たかと思ったのですよ。）」など冗談混じりの「②暗示的ほめ」パターンが用いられることが確認できた。特にほめ手が男性である場合は多かった。これは「対等ほめ」でも述べたように、上の立場の先生や先輩に対しても、タイ語母語話者の学生、特に男の学生は、冗談などを言って親しみを表そうとするためであると解釈される。

なお、コーサティアンウォン（2004）では、「下上ほめ」については扱っていないため、ここでは「下上ほめ」のほめに対する返答がどのようなものであるかを述べることができない。この点については、今後さらに調査する必要がある。

終わりに

以上のように、本稿では、「ほめ」および「ほめに対する返答」について、日本語母語話者とタイ語母語話者の類似点、相違点、そして両言語のそれぞれの特徴を明らかにした。今後は、自然な会話の聞き取りや、ドラマ・映画の資料など、他のデータからの「ほめ」と「その返答」も分析し、様々な社会的要因が、どのように「ほめ」と「ほめへの返答」に影響を与えるかについて、さらに研究を続けていきたいと考えている。

本研究が、日本語母語話者とタイ語母語話者による、異文化間コミュニケーション上の相互理解への一助となれば幸いである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語とタイ語の「ほめ」と「ほめに対する返答」について、日本語母語話者とタイ語母語話者のアンケート調査のデータを用いて行った対照研究である。日本語とタイ語の言語行動に関する対照研究は未だ少なく、本論文は、その先鞭をつけるものとして意義深い研究であると言える。題目の「ほめに対する返答」については、著者がすでに修士論文で研究を行っており、その結果を踏まえた上で、本論文では「ほめ」に関する研究を行い、「ほめに対する返答」の結果と合わせて、日本語とタイ語の「ほめ」および「ほめに対する返答」の特徴を、表現パターンと言語形式の観点から論じている。

本論文で用いているデータについては、日本語母語話者120名、タイ語母語話者140名という多人数に対して行ったアンケート調査（「ほめ」の状況における発話を記述式で答えるもの）であり、両言語の傾向をつかむには十分な量であったと言える。また、「ほめ」の状況設定として、「ほめの相手との上下・対等関係」「ほめの相手との親疎関係」「性別」「ほめの対象：能力・性格・外見・持物」という4つの社会的要因を組み合わせて、合計24の状況を設定したことにより、両言語において「ほめ」表現の選択に関わる要因が異なることを明らかにすることができたことも、評価に値する。

分析結果として、両言語ともに、「ほめ」は親疎関係の「親」の場合の方が起こりやすいが、「親」であっても、両言語で用いられる表現パターンや言語形式は異なること、具体的には、タイ語では［親」の相手に対して、「冗談」を用いた「ほめ」が多く見られることが、大きな特徴として挙げられた。また、日本語では、上下関係の方が親疎関係よりも重視されるが、タイ語では親疎関係の方が重要であり、親しい先生に対しても冗談を使うことができることが、日本語と大きく異なる特徴であった。また、具体的な表現に関して、日本語の特徴として、相手と自分を比較し、「自分にはそんなことはできない」と、自分を謙遜して言うことで相手をほめる表現が見られたが、タイ語では「○○（有名な歌手）に似ているね」など、第三者と比較して相手をほめる表現が現れていた。さらに、日本語では表現にあまりバリエーションが見られず、型にはまった形式の回答がほとんどであったが、タイ語では表現が多様であり、回答者によるオリジナルに工夫された表現が多く見られた。このような結果は、先行研究では指摘されておらず、本論文の大きな功績であると言える。

本論文で明らかになった、両言語における様々な違いは、両言語の社会文化的背景によるものであるが、その点についての考察が十分ではなかった点が、本論文の問題点として指摘できよう。しかし、24種類の状況における回答の量的分析、および回答に現れた表現の分析と、両言語の分析結果の対照を詳細に行った本論文は、400ページを超える大部であり、特に大量に挙げられている表現の例が、両言語の背景にある具体的な社会文化の現れとして、読み手の興味を喚起する結果となっている。限られた社会層や年齢の調査協力者のデータであるため、両言語についての一般化をするには至っていない点や、より簡潔で全体を見通すのが容易であるような論文の構成に工夫の余地がある点なども、問題として指摘はできるが、言語行動の対照研究として、今後の研究のモデルとなるような優れた研究であることは疑いがなく、博士論文として高く評価できるものである。